

花里吉正の苦悩と未亡人を巡る諸問題

— 闘病中に記した『和峯記』(1950年3月～7月)の分析を中心に—

中 崑 洋

1. はじめに

本稿では、ホームヘルプ事業の推進者とされる花里吉正(1921.1.15-2008.12.14、のちの竹内吉正、以下、花里)の終戦直後の1950(昭和25)年の実生活及び思考に着目する。その人物史研究について、特に20歳代後半の彼の苦悩や幸福感に焦点を当てて論ずる。その目的は、花里が、戦後の1950年代に、わが国最初の組織的なホームヘルプ制度である家庭養護婦派遣事業の意義を認識し、その促進に尽力した背景思想や実践基盤には、彼自身のいかなる苦労や生活体験があったのかを探究することにある。そこで、1950(昭和25)年3月～7月の約半年間の生活ぶりを記した彼直筆の日記『和峯記 25.3.1～』(1950年3月～1950年7月、以下、日記)の分析を中心に¹⁾、『以和為貴——花里家の記録』(1993年)や「竹内吉正の年表」(1886年1月27日～2009年6月24日)などを参照しつつ論考する。

但し、この時期は戦後、捕虜となってシベリア鉄道でロシアに輸送されている最中に列車から飛び降り、脱出したのち、1946(昭和21)年7月、25歳で命からがら復員した花里が、「両肺粟粒結核、痔ろう潰瘍あり、大気安静療法で先ず十年」との診断を受け(宮坂編 1993:34)、長野赤十字病院での約5年間の療養生活を余儀なくされた時期と重なる。さらに、終戦直後の上田進駐軍の進出に伴う一般市民の不自由な生活に加え、とりわ

け、母子世帯や要保護世帯における生活問題が深刻化していたため、そうした時代背景・地域的事情も整理する。

一方、倫理的配慮としては、花里関連史料の引用許可並びに研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た（2009年10月3日）。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

以下、Ⅱ. では敗戦後の上田駐屯占領軍の進出と市民の生活を捉え直し、Ⅲ. では敗戦から5年後の花里家の実態や困窮に照射し、Ⅳ. では花里の句作と人生考について論考し、Ⅴ. では花里の初恋と幸福感について究明し、Ⅵ. では1950年代を中心とした母子世帯・要保護世帯の生活実態及び未亡人を巡る諸問題を整理する。

Ⅱ. 敗戦後の上田駐屯占領軍の進出と市民生活

1. 上田駐屯占領軍の実務（1945-1946年）

日本による無条件降伏によって終戦を迎えたが、その後の占領政策によって、民主的平和国家創造を旨とし、武装解除、超国家主義・軍国主義の排除、独占禁止法による財閥解体等が進められた。さらに新憲法制定により、戦争放棄・永久平和、国民の基本的人権の尊重、民主的國家の建設が宣言され、立法・司法・行政という三権分立のなかで国会第一主義をとることになった。しかしながら、絶望と窮乏のどん底にあった日本国民は、憲法に対してさえ検討の機会や気力を失い、いわば連合軍軍（GHQ）によってわが国の戦後改革のほとんどが何の抵抗もなく断行された（更級埴科地方誌刊行会編 1967:837）。そうしたなか、1945（昭和20）年8月28日、日本の占領統治に入るため、約150名で編成された第11空挺師団連合軍先遣隊が神奈川県厚木飛行場に到着する。続けて、上田市にも上田駐屯占領軍が進出し、表1に示す如く、上田飛行場の飛行機全部焼却（1945年10月27日）、住民所持の刀・剣・鉄の提出（打合せ、同年12月4日）、新聞・雑誌・時報・青年会報等の各種出版物の検閲（同13日）などの実

務が進められていった。こうしたとり組みは敗戦国民である日本人にとってはやむを得ないことであったが、戦後復興に向けた機運に対し、さらなる苦難に追い打ちをかけるものであった。

表 1 敗戦後の上田駐屯占領軍の実務（1945年～1946年2月）

| | |
|---|----------------|
| 一九四五（昭和二十）年 | 十月 三日 神科国民学校調査 |
| 十月 七日 同校の教壇用の銃・剣の押取 | |
| 十月 十七日 上田飛行場の飛行機全部焼却 | |
| 十一月 四日 住民所持の刀・剣・銃の提出の打合せ（神科伊勢田） | |
| 十一月 十日 新聞・雑誌・時報・草花会誌等各種出版物の検閲 | |
| 一九四六（昭和二十一年）年 | |
| 一月 二十日 上田警察署 朝鮮人との紛争解決の手助けを軍政部長に求める義判の手帳と裁判が開かれる場所を説明 | |
| 一月 二十日 対敵諜報活動として、大隊行状表を、軽井沢に行き、ドイツ人家族のお金（百円・百下）を没収 | |
| 一月 後半 朝鮮人が密造で上田警察署に運捕された | |
| 一月 二日 上田中学校の火事（午後四時三〇分） | |
| 一月 十四日 上田地区朝鮮人二人 朝鮮に送還 | |

【出典】上田市誌編さん委員会編（2002）『上田市誌 近現代編（一）——新しい社会を求めて』上田市・上田市誌刊行会、209-10頁。

2. 三好町『昭和二十年常会 記録簿』にみる市民生活の実情

一方、こうした占領軍の実務や動向は、一般市民のなかでもとりわけ、生活困窮・窮乏に直面しがちであった子女の不安を増大させた。例えば、『続小県・上田歴史年表』によれば、「占領軍が上田市に入ってくるほぼ1ヶ月前の1945（昭和20）年8月25日、神科では『進駐軍が来る』とて神科校奉公室も一瞬にとりこわす、神科校へ疎開中の海軍工蔽医学部も一切とりこわして、あちこちへ物を分けたりこわしたり四分五裂である」などと狼狽ぶりが記録されている。さらに、表2に示唆した『三好町 昭和二十年常会 記録簿』（1945年9月20日）には、「即刻実施事項」として、以下の10点が明示され、進駐軍に対する警戒や当時の人々の苦しい心情・

生活ぶりを窺わせる。

- 一. 敵愾心ヲ昂揚スルポスターハ焼却
- 二. 星章ヲ除去スルコト (郡の肩章や襟章)
- 三. 婦女子ハ防空服装 (寝巻類似物ヲ避ク)
- 四. 婦女子ノ夜間行動ハ絶対ニ慎ムルコト
- 五. 米軍人ト行逢フ場合、特別視シ又ハフリカエリヲセズ平然ト歩クコト
- 六. 米軍周囲ニ子供ガムラガリ或ハ見物ニ行ク如キコトハ絶対セザルコト
- 七. ポケットニハ手ヲ入レ歩カザルコト (拳銃ヲ秘マセアル如ク怪ムガ為ナリ)
- 八. 腕時計或ハ身ニツケアル貴重品類ハポケットニ収納シ置クコト
- 九. 家ノ珍重物ハ隠匿スルコト
- 十. 道路ハ明ルク家ハ暗クスルコト

表 2 三好町の『昭和二十年常会 記録簿』(抜粋)

| | |
|---|---|
| <p>九 十一日 午後四時三十分開演会 白紙</p> <p>二 進出軍ハ軍事機密ヲ漏ルル事見込マレ上田へ米軍進出ニ于テ名付ト推測ヲル 進出軍ニ切込ニ注意事項</p> <p>(一) 行動ハ常ニ服装ニ依リテハ事 広帯際ハ常ニ備置シテ之ヲ用スル 進出軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル</p> <p>(二) 公衆手紙ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル リシテ又別ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>(三) 各戸戸籍リハ物置置ルニ依リテ 外人ノ食ハ戸籍ニ依リテ 婦人等ノ服装ニ関スル化装事項 乳児一歳以下ハ化装品ヲ用テ出マシム 先方ノ服装ニ類シテ物ヲ着ル 進出軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>(四) 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>三 講和条約ヲ一茶一飯ニ忌避スル 十日十四日 午後四時三十分開演会 集 集 集 申 略</p> <p>四 米軍進出ニ対シテ自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>開演会事項 一 敵軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル 二 星章ヲ除去スルコト 敵ハ星章ヲ用スル 三 婦女子ハ防空服装 (寝巻類似物ヲ避ク) 四 婦女子ノ夜間行動ハ絶対ニ慎ムルコト 五 米軍人ト行逢フ場合、特別視シ又ハフリカエリヲセズ平然ト歩クコト 六 米軍周囲ニ子供ガムラガリ或ハ見物ニ行ク如キコトハ絶対セザルコト 七 ポケットニハ手ヲ入レ歩カザルコト (拳銃ヲ秘マセアル如ク怪ムガ為ナリ) 八 腕時計或ハ身ニツケアル貴重品類ハポケットニ収納シ置クコト 九 家ノ珍重物ハ隠匿スルコト 十 道路ハ明ルク家ハ暗クスルコト</p> | <p>九 十一日 午後四時三十分開演会 白紙</p> <p>二 進出軍ハ軍事機密ヲ漏ルル事見込マレ上田へ米軍進出ニ于テ名付ト推測ヲル 進出軍ニ切込ニ注意事項</p> <p>(一) 行動ハ常ニ服装ニ依リテハ事 広帯際ハ常ニ備置シテ之ヲ用スル 進出軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル</p> <p>(二) 公衆手紙ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル リシテ又別ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>(三) 各戸戸籍リハ物置置ルニ依リテ 外人ノ食ハ戸籍ニ依リテ 婦人等ノ服装ニ関スル化装事項 乳児一歳以下ハ化装品ヲ用テ出マシム 先方ノ服装ニ類シテ物ヲ着ル 進出軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>(四) 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>三 講和条約ヲ一茶一飯ニ忌避スル 十日十四日 午後四時三十分開演会 集 集 集 申 略</p> <p>四 米軍進出ニ対シテ自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル 又ハ色ノ取寄ルル事自備ノ支分ニ依リテ之ヲ送付スル</p> <p>開演会事項 一 敵軍ハ常ニ偵察シテ之ヲ用スル 二 星章ヲ除去スルコト 敵ハ星章ヲ用スル 三 婦女子ハ防空服装 (寝巻類似物ヲ避ク) 四 婦女子ノ夜間行動ハ絶対ニ慎ムルコト 五 米軍人ト行逢フ場合、特別視シ又ハフリカエリヲセズ平然ト歩クコト 六 米軍周囲ニ子供ガムラガリ或ハ見物ニ行ク如キコトハ絶対セザルコト 七 ポケットニハ手ヲ入レ歩カザルコト (拳銃ヲ秘マセアル如ク怪ムガ為ナリ) 八 腕時計或ハ身ニツケアル貴重品類ハポケットニ収納シ置クコト 九 家ノ珍重物ハ隠匿スルコト 十 道路ハ明ルク家ハ暗クスルコト</p> |
|---|---|

【出典】 上田市誌編さん委員会編 (2002) 『上田市誌 近現代編 (一) ——新しい社会を求めて』 上田市・上田市誌刊行会, 207-8 頁.

Ⅲ. 終戦から5年後の花里家の実情と「いい人」とは？

なお、こうした緊張感や閉塞感が充満したような不自由な生活を余儀なくされていた地方都市の実情の一方、1950（昭和25）年頃には、自由党結成、朝鮮戦争勃発、旧軍人3,250人の追放解除などの政策展開が見られた。なかでも、社会福祉領域では、黒木利克の試案である「社会福祉事業基本法案要綱」がGHQに提出されたほか、生活保護法の公布・施行、社会福祉協議会組織の基本要綱の決定、全国養老施設協議会結成などの動きが見られた。他方、上田市では、上田市立盲学校が県立移管になり長野市に移ったり、横内浄音（社会福祉法人上田明照会創立者、浄土宗呈蓮寺第27代住職）が上田市優性保護委員会委員として活躍するなど²⁾、戦後の混乱のなか、地元の民間社会福祉事業団体の奮闘が目を惹いた。

このような状況下で、1946（昭和21）年7月の復員以降、体調を崩し、長野赤十字病院において入院患者の身であった花里は、「両肺粟粒結核、痔ろう潰瘍あり、大気安静療法で先ず十年」という先の見えない闘病に苦しんでいた（宮坂編1993:34）。加えて、両親を失い、8人兄妹の次男として病床にあった彼の心境に思いを馳せると、到底やり切れないものがあつたことが容易に想像される。しかしながら、こうした苦境のなかでも彼は自暴自棄になることはなく、むしろ兄弟の結束を窺わせる記述を残している。

兄来る。兄木内國さんを訪問。大矢氏重態。熱上昇せずも気分若干悪し。午前中に兄来院。転職の模様及び現在三つ葉産業にあるを告げ、種々なる現状を伝へ聞く。我、「兄上は我々兄妹にとって絶対的なるもの故を力説する」手紙を手交。選ぶ職場に関しての参考意見とす。（日誌：1950年3月1-2日、鍵括弧内ママ、傍点筆者）

上記の傍点箇所には花里の兄への信頼感を看取できるが³⁾、他方、1943（昭和23年）の時点で全国に合計12万3,511人いたとされる孤児のうち、引

き取りのなかった7,117人が一時浮浪児になるなどの荒廃状況も見られ⁴⁾、戦後日本の混乱は続いていた。御多分に漏れず、花里家でも長兄、長女の活躍を頼みの綱とした、極めて苦しい生活を余儀なくされ、こうした苦境は当時の浮浪児の困窮とも通じるものがあったと考えられる。花里の場合、単なる経済的側面のみならず、親亡き後の子どもたちが受ける心理的側面における苦難という面で多大な苦勞をしており、以下の如く、当時の苦境を吐露する。

日曜の午後春枝布団を持参して来る。而して家庭問題や職業に関して相談又大いに激励す。春枝、吉澤氏との関係については余り語らなかったが、語る内に「親のない人だから」と云ふ理由で大いに注目させられたとか此處まで来て何か泪ぐんで了った。云ふに云へぬ一面もこらになるのかと思ったりして又激励す。しかし何より神と共にある気持には大いに同處するものあり。我も亦嬉し。(日誌：1950年3月5日、鍵括弧内ママ)⁵⁾

上記の「親のない人だから」に親亡き後の子どもたちの寂寥と周囲の偏見が窺え、こうした妹の切実な訴えに対しても、病氣療養中であった花里ができることは限られていた。せいぜい妹の話の聞き理解を示すことしかできなかった花里において、ここにも彼の苦しい胸の内が推察される。そして、花里が精神的支柱を求め、「神と共にある気持」と記述しているように、宗教的影響を強く受けていたことも見逃せない。さらに、花里の考察は、以下の如く、人には相手の中傷したり、賞賛したり、様々なタイプがあるが、「いい人」とはいったいどういうタイプの人のことなのかを熟考するに至っている。気前が良いことをはじめ、兄妹仲が良いことや、平等分配といったことのみならず、もっと深い概念であると花里は考究している。

人があの人はいい人だと云ふいい人と云ふのは物質をよく給ふ人の事である。我はこのいい人にはなり得ない環境にある。しかし1つのものを半分づつ分け合ふ気持はある。しかしこんなのはいい人の内には入らないのであらう。付添の小母さんの言葉と態度より痛感す。（日誌：1950年3月8日）

IV. 花里における創作活動と人生考

1. 『信濃毎日新聞』への投句と孤独

生活苦や家庭環境の不遇さを考え合わせつつ、「もっと信仰に活きた力を持ちたい気持ちに立つ」などと（日誌：1949年12月4日）、キリスト教信仰に依拠しながら熟考していた花里は、一方で、何とか自主独立の道はないかと模索する。ここでは、資格取得と俳句創作に力を入れようと試みている。具体的には、「衛生管理者資格に関し、鷹見氏より種々説明を聴取。期を見て之が資格を得んと努力す」とか（日誌：1950年3月13日）、「信毎に俳句又出ず。之で紙上に招会されたもの十枚に及ぶ。兄妹の慶びと励みとなれば之以上のものはない」などと記し（日誌：1950年3月15日）、将来像の具現化に努めようとする。なかでも、俳句創作において、ポピュラー性について次のように論究し、表象的ではなく一步深堀りし、この理解が出来得るように勉強を重ねる必要性を認識する。

午前俳句添削原稿に関し、宮嶋氏三井氏と共に討論す。即ち俳句はポピュラーな面で発展するべきであり、一人よがりでは無意味だと三井氏は謂ふ。我之に答へて我々が解し難いとするは未だその心境、即ち掘り下げて居らぬから也。ポピュラーなもののみにては流され易く低く浅い。一步深く入る處に我々の現在では解し難いものあり。故に努力してここに立入って始めてその道を味はへるものと信ず。我は断言す。一面我々が平易で又萬人いいとされる句は我々が知る以上にいい面があるので、先づ之が良しとされるのであり。今理解出来ないとするのは先づ勉

強不足故だ。少なくとも之等はその道を知らざる人の泣言と云ふべし。

(日誌：1950年4月14日、傍点筆者)⁶⁾

このように勉強不足を戒めた花里は、他方、読書からも少なからぬ影響を受けている。具体的には、「山本茂実著『救はれざるの記』」を読む。読書後感に関し整理するに、左の如く結論する。自由主義、個人主義に徹するは不可なり。人間総て『衆生総て之凡夫』なるが故に、主義思想は一ケのパンのみに過ぎず、茲に中庸とは偉大なる言葉なるを感ず。我は科学的客観的に自己を中庸に處したいなどと記述し(日誌：1950年3月13日)、中庸を保つ自己こそ尊いものであり⁷⁾、目ざすべきところとする。1950(昭和25)年3月23～24日には、「多面にて騒々ふな一面、孤独を尊ぶ我はこんな時俳句を作りたい。こんな孤独と現実の対立それ、そこに我芸術的感覚が生れるらしい。之は孤独を脱皮する方法そのものかも知れぬが、少なくとも現在の我はそれのみだ。三年生卒業式行はれ、生徒さん挨拶に来る。感謝して人々を送る」などと(日誌：1950年23～24日)、孤独と芸術との関係を思考し、ここでは、芸術に没頭することが孤独から脱出する一方法であることを看取する。

2. 自殺と人生について

上記のように、孤独という自身の現状を捉え直した花里は、山崎氏との関わりを通じ、自殺や人生について考える好機を得ており、熟慮の末、彼は以下のように詳述する。なお、この記述は、壮年期の花里の人生観を探究する数少ない文章といえ、注目されよう。

夕食後、山崎氏我に問ふ。「人事を画してからは苦しくなければ青酸カリでものむか」と。「人事を画してと云ふからには斯る自殺行為は如何」再び我言及す「自殺は断じて人事を画したとは云へぬ」と。人生は最後の一瞬まで人生である。最善を果し、更に最善を期することで人生也。

最後の一瞬の「キセキ」を念じても生を眞価づけることこそ、眞の人生也。何となれば例へ一灯なりとも何処でこの一灯を頼る旅人があるかも知れぬ故、偉なる哉。この人生也。山崎氏我言に感じたらし。我は云ふ、山崎氏、難病とは云へ愛すべき子供、愛すべき妻を思へば一層頑張れと。（日誌：1950年3月25日、鍵括弧内ママ）

つまり、花里は生の最後の一瞬まで諦めることなく、奇跡を信じ、最善を画することこそが人生であり、病に負けず、愛するもののために奮起しなければならないとする。加えて、その根拠を「しつけ」を例にとりながら、次のように論じ、神と共にあるべき人生について考究する。

しつけはその本質に於いて決して自由の抑圧ではない。それは子供の将来においてより大きな自由を獲得するための基礎段階である。そしてそれはまた目前の子供の欲求に負ける盲愛に捕はれず遠く子供の将来を見直す徹底した知性に裏づけられる愛の営みでなければならない。と又大いに共鳴するものなり。性欲に悩むも修養書に時をかせぐ。人生は総て神の之に神と共にあるべきだと知る。例へ生、死の間に立っても総て神に我身はあるのであると思ふ。即ち人の生きるはパンのみに依るにあらず、神の口より出ずる総ての言葉にあるを再確認す。（日誌：1950年3月26日）

V. 花里における初恋と幸福について

生や死といった概念の考察から、人生観を捉えようとしていた花里は、自身の内面において宗教観を育む機会を得ていたが、その一方、長野赤十字病院での入院生活を通じ、身近な人々からも思想的影響を受けていた。まず、彼の日誌の端々から解読できる宗教的影響についてみていこう。なかでも、ここでは、彼に対し、少なからぬ影響を与えたと考えられるメソジスト教会の足跡を整理することから始める。日本メソジスト教会は

1907年（明治40）年、アメリカ南メソジスト監督教会（南美以教会）と静岡を中心に伝道していたカナダ・メソジスト教会が合同して誕生し、その後、横浜英和女学校と名古屋英和学校に加え、横浜第一、第二、第三美普教会、平塚、茅ヶ崎、伊勢原などにも会堂が建設された。とりわけ、横浜に続き名古屋に伝道事業を開始した結果、1897年には名古屋第一（広路）教会、第二（中京）、第三（熱田）などに続いて、静岡、浜松と東海道沿いに伝道事業が進められ、日本美普教会になったという。こうした背景をもつカナダメソジストの婦人宣教師E・L・Bates（1892-死亡年月日不詳、以下、ミス・ベーツ）から⁸⁾、花里は再三の見舞いを受け、以下のよう吐露する。

怠惰な心境の最近に今晚は誠に澄んだ気持を得てプラン組む。ベーツさん来院下され、ヨハネ伝を語る。而して英語バイブルNew Testament下さる。再三の訪問に床にある我、感極む。愛、愛、偉なるは愛也。（日誌：1950年5月15日）

このように、ミス・ベーツの癒しや聖訓に感激し、愛の偉大さを感じていた花里は、「女性に会談するのみにて我は大なる力を得る。そして感激に充ちた句が生れる。又之に反し会談の遠ざけられた時は孤独なる句がにじみでて来る」などと記し（日誌：1950年6月10日）、女性との会談を通じ、偉大なる力を得ていたことが解読できる。反面、会談した女性のなかには婦人宣教師の他、様々な人がいたと考えられるが、ある一人の献身的な看護にあたった看護婦（現、看護師）の名前を日誌内に頻りに記述していることは注目される。具体的には、「K看護婦」（日誌：1950年4月6日、伏字筆者）、「夕刻、平出さん、丸山さんなど、病棟に來り皆を騒がすKさんより禮状來る。25.6.9.」などがその一例であり（日誌：1950年6月10日、伏字筆者）、1950（昭和25）年6月10日付の日誌内には次のような礼状が添付されている。

【花里吉正宛のK看護婦による手紙】

今日又しょんぼり考へなくてはなりません。静かに静かにこの病舎を去り度いと希って居ります。患者さんの事は何んとしても考へさせられるのでつらいですけど、どんなに毎日こんな目で（でも勤務中は精一杯に務めて居る心算なんです）上の方から見られるなんで……きっときっと父母達も悲しんで居ると思います。遠からず、退職を希望しています。よりよきお兄様として心中申上げました。何卒至らぬままに御察し下さいましてよき指導をお願いお選び下さいませ。余り御無理をなさいません様。花里さま江（日誌：1950年6月26日、丸括弧内ママ）

上記の手紙を受け取った花里は、恋愛にとことん悩み、苦悩した挙句に、自身の進むべき真の道を探索しようとする。そして、「夜、Kさんより便りを手に渡され、再読考慮しきり。睡眠不十分、眞情含まれ切なるものあればある程、我は冷静にならざるを得ない。午前中に我の感として日新して歩めと激励す。女性との関係は斗病生活にあればある程に苦しい思ひひがある。しかしどうにもならぬ處と冷静に心する時、程度も自ら解る様な気がする。やはり我は女性に対して眞に許せるのは妹のみだ。それは全くつらい淋しい思ひだ。しかし、之が斗病かも知れない。熱情あればあるだけに冷静に自己を見出して行かん。之が我進路か」などと記述し（日誌：1950年6月27日、伏字筆者）、妹など身内のみが心許せる存在であると再確認している。

他方、それでも彼のK看護婦への想いは充満し、「恋心のどうにもならぬ切なさに遂に昨夜は徹夜して了った。種々なる思ひ綴って見た。しかし現在又将来も如何ともし難い事などなのであるが、独り思ひを發展したり連想したりして時を費す。が、結局理性の解決にてこの気持がもし眞の恋であったなら、自分の心に何時までも清く正しく又もっとも美しいものとして留めねばならぬ。恋する人はK看護婦その人である。我は断じて理解ある又賢明なるる彼女にありのままを傳へた。しかし彼女には斯く熱

なき様繰返し告ぐ。それは尊い公務を思へばのことなり」などと（日誌：1950年6月30日、伏字筆者）、想いを打ち明けている⁹⁾。自身の言動について、花里は後日、冷静に分析し、以下のように記述する。

現在少なくとも我は恋すると云ふ感に充満して居る。それは入院してこの方、接するものとして看護婦さんあり。遂にその中にKさんを見た。彼女もことの外我に近づき我も亦彼女に近づく多くのものがあり、魅力的なるものを多く感じた。そのそもその始りは互の尊敬にあり。今正月には新しき花を我机辺に贈って呉れた。（最もその後我感を害した事があったが）其後の親しさは看護の度に加はるに到った。最近に到っては彼女からも親しき便りを送られる様になり、その度に恋は加はる様に見られた。しかして我は始めて恋と云ふものの切なさを見又之を眞実に彼女に打開けた。しかし斗病の身であり、将来も不明なる躬を思ひ恋する人として始めて知ったのは彼女であり、それなるが故に最も印象深き女性である事も打明けた。しかしそれだからと云ひ彼女の躬に関して責任を帯びる事は不可能なるは明白である。そこにどうにもならぬ切なさもある。しかし我はかく心に映じた事を清く正しく又最も新鮮なるものとして固く心に留めて置きたいと告げた。（日誌：1950年7月15日、丸括弧内ママ、伏字筆者）

つまり、「斗病の身」であることや「将来も不明なる躬」であることが、恋愛成就に至らなかった要因と感得でき、花里自身は、「清く正しく又最も新鮮なるものとして固く心に留めて置きたい」との如く（日誌：1950年7月15日）、きれいな思い出として残そうとする。さらに、「この恋心はこれ以上進んではいけない。彼女に恋した時間唯の感謝の人として見なければならぬ。我は断じて斗ふ。我理性を以って。しかし何もこだわることのない何も無い恋と云ふものを唯の一回して見たい。我の初恋の人は架空の人であり、又その人は感謝のみの人であった。否そうせねばならなかつ

た」などとも言明し（日誌：1950年7月15日）、初恋の人を架空の人のように想起することで、苦難を脱却しようと努めている。このような経験をした花里は、自分にとっての幸福とは何かについて、以下のように熟思する。

夕食後、三井氏と人生の眞の幸福に関し、論ず。即ち、青年期は自己を見出さず現実に反した理想を以って眞の幸福として居る（我、之は幸福にあらず、青年の単なるあこがれと思ふ）成年してからは現実に対し本質なる自己に幸福と認める。幸福は追ふものにあるのではなく、自己に見出すものありと此処に到り共鳴す。（日誌：1950年4月16日、丸括弧内ママ）¹⁰⁾

すなわち、彼にとって幸福とは現実的かつ本質的なものであり、自ら懸命に追い求めるものではなく、自己の内面に見出そうとすることで生まれるものとの認識を得ている。

VI. 母子世帯・要保護世帯の実情と未亡人を巡る諸問題

1. 母子世帯・要保護世帯

ところで、上記のように日々、内省に努めていた竹内だが、上田市ではいち早い戦後復興に乗り出そうという機運が高まっていた。1953（昭和28）年度（決算額）には、市の全予算の5.0%が失業対策費に、13.9%が社会及労働施設費に充てられていた（上田市役所商工課統計係 1956:25-7）。ところが実際は、長野県下の未亡人〔被保護者〕が約8,200人とされた1947（昭和22）年当時、要援護者のなかで保護されていない人々が4,599人いるなど、生活困窮・窮乏問題は根本的に解決されていなかった。要保護婦人世帯の職業分類別人員率（全国、1951年時）を見ると、「家内手工業」20.4%、「雑役婦」18.0%、「工具」17.3%、「無職」14.5%、「和洋裁」13.0%、「会社事務員」4.2%、「農業」3.2%、「行商」2.8%、「新聞配達」2.1%、

「自家営業」1.8%、「その他」の順となっており、これらはいずれも低賃金であり、とりわけ、「要保護婦人世帯の生活苦・就業難」（無職：14.5%）という重大な問題が残されていた。

表3 母子世帯・要保護世帯の特徴

| | | |
|--------------------------------|--|--|
| 母子世帯になった原因【全国】 | 1948(昭和23)年 | 「一般死亡」52.3%、「戦残」22.2%、「戦災死」2.9%、「変死」0.73%、「その他」22.0% |
| | 1952(昭和27)年 | 「その他死別」47.0%、「戦傷病死戦災死」38.1%、「離婚」7.6%、「その他」7.3% |
| | 1956(昭和31)年 | 「その他死別」51.8%、「戦傷病死戦災死」26.1%、「離婚」14.6%、「その他」7.4% |
| 要保護世帯の保護期間【全国、1951年時】 | 「4年以上5年未満」22.7%、「1年以上2年未満」20.0%、「5年以上」16.4%、「3年以上4年未満」15.5%、「2年以上3年未満」12.7%、「1年未満」12.7% | |
| 長野県下の母子世帯生成の時期の分布(%) | 「1942-1945年」34.9%、「1951-1956年」32.0%、「1946-1950年」24.8%、「1937-1941年」6.6%、「1936年以前」0.9%、「不詳」0.8% | |
| 要保護婦人世帯の職業分類別人員率【全国、1951年時】(%) | 「家内手工業」20.4%、「雑役婦」18.0%、「工具」17.3%、「無職」14.5%、「和洋裁」13.0%、「会社事務員」4.2%、「農業」3.2%、「行商」2.8%、「新聞配達」2.1%、「自家営業」1.8%、「その他」 | |
| 要保護婦人の年齢別構成率【全国、1948年時】(%) | 「31-35歳」32.0%、「36-40歳」26.4%、「41-45歳」15.2%、「26-30歳」11.3%、「60歳以上」6.3%、「51-60歳」4.9%、「46-50歳」2.1%、「21-25歳」1.8% | |
| 上田市の母子寮の状況※長野県下には6寮【1947年時】 | 母子寮 | (収容定員)20、(収容世帯)19、(収容人員)48 |
| | 見習寮 | (収容定員)10、(収容世帯)10、(収容人員)26 |

【出典】厚生省・全国社会福祉協議会連合会(1952)【社会福祉行政資料】64-71頁、厚生省大臣官房企画室(1958)『厚生白書 昭和32年版』大蔵省印刷局、236頁、及び上田市総務部庶務課統計係(1964)『市勢要覧 昭和38年度』上田市役所、48頁、寺脇隆夫編(2016)『母子・児童・老人福祉基本資料第1巻』柏書房、28-58頁を基に、筆者整理。

【注】網掛け部分は、1951(昭和26)年時の要保護婦人の職業別人員率を示しているが、多くの人が低賃金であった「家内手工業」「雑役婦」「工具」「和洋裁」か「無職」(14.5%)であったことが窺え、当時の女性の生活自立の困難さが窺える。

2. 未亡人の生活実態を報じる地元新聞記事(1940年～1950年代)

こうした状況下で、特に生活困窮・窮乏が顕著だったのが、母子世帯や多子世帯の婦人、並びに未亡人などの所謂、女性たちであった。なかでも、未亡人に関しては、表3に示したように、家政婦会結成、食堂経営、学校給食婦、内職、輸血協会結成、たばこや経営などの様々な試みがなされる一方で、転落寸前のケースにおいては、夜の世界に身を投じたり、血を売る未亡人まで登場した。とりわけ、売血の問題については、「小県未

亡人会と上田市未亡人会で協力計画、会員の賛成者も多い。暗いイメージだが医者と連絡して明るいものにしたい」と報じられる一方（信濃毎日新聞社 1952:8）、1952 年度長野県議会でも論議され、「県内の約 600 人の未亡人が土方や血を売って生活している」ことが問題視された（『1952 年度長野県議会議事録』）。なお、1952（昭和 27）年当時の上田市内では、「（家庭養護婦派遣）事業は本会が家庭養護婦を雇用し不時の疾病障害その他により家事を処理する者が、その処理に困難となった家庭に対してこれを派遣し、親戚、近隣等の協力と共に積極的な援助を与えることによって、社会福祉をはかる」という目的で始動した家庭養護婦派遣事業の創設には至っておらず（上田市社会福祉協議会 1956、丸括弧内筆者）、女性の生活問題や自立支援の方策が具現化するまでにはまだ若干の時間を要するのであった。

表 4 「未亡人」の生活実態を報じる地元新聞報道記事(1940～50年代を中心に)

| 見出し | 出典 | 概要 |
|-----------------|---------------------------|---|
| 穴倉に父子が抱寝 | 『信濃毎日新聞』 1947.11.23(2) | 寒空に家なき人々、家財売る未亡人は木賃宿を転々 |
| 未亡人が三割余 | 『信濃毎日新聞』 1948.3.25(2) | 県下被保護者 15,479 世帯（うち、未亡人で子ども or 老人抱える世帯は 33%） |
| 血を売る未亡人 | 『信濃毎日新聞』 1948.9.7(2) | 着々と組織化する南佐久未亡人会 佐久病院の行為で会員は 3 割引きで受信可（但し、農閑期には同院ので労働奉仕する） |
| 再婚よりも自活の途を | 『信濃毎日新聞』 1949.4.22(2) | 要保護者の半数を占む未亡人 少しの内職を分け合う |
| 未亡人に職業周旋 | 『信濃毎日新聞』 1949.9.17(2) | 下高井で郡未亡人を対象に講習会開催 |
| 未亡人で上田家政婦会 | 『信濃毎日新聞』 1949.9.27(2) | 上田職安が未亡人生活保護策の一環として上田家政婦会を結成 |
| 未亡人いじめ | 『信濃毎日新聞』 1950.2.6(2) | 下宿人保険外交員を恐喝容疑で調べる |
| 未亡人食堂 | 『信濃毎日新聞』 1950.4.3(2) | 白田町で 5 人の未亡人が集まり開店・営業 |
| インテリ未亡人が謎の自殺 | 『信濃毎日新聞』 1950.4.29 | 大桑村婦人会同村赤十字奉仕団副団長であった未亡人が謎の自殺を遂げる |
| 家庭内職 仕事の割に工賃が安い | 『信濃毎日新聞』 1950.5.12 | 飯田市未亡人会などで希望者増える |
| 未亡人に「移動相談」 | 『信濃毎日新聞』 1950.8.7 | 埴科地方の未亡人は 800 人が多い |

| 見出し | 出典 | 概要 |
|------------------------|---------------------------|---|
| 未亡人を炊事係に学校給食に県費出して | 『信濃毎日新聞』 1950.10.5(2) | 県下で 5000 人とされる未亡人の失業対策の具体化 |
| 給食婦は資格者を | 『信濃毎日新聞』 1950.10.29(2) | 長野臨時市会、野尻湖導水問題は近く成案 |
| 輸出向造花を未亡人内職見つかる | 『信濃毎日新聞』 1950.12.3(2) | 南佐久地方事務所による未亡人の手内職斡旋 |
| 学校給食婦の採用 | 『信濃毎日新聞』 1950.12.19(2) | 匿名性、衛生第一主義を |
| 未亡人の輸血協会 | 『信濃毎日新聞』 1952.11.16(8) | 小県未亡人会と上田市未亡人会で協力計画 会員の賛成者も多い。暗いイメージだが医者と連絡して明るいものにした。 |
| 上小で未亡人のタバコ屋が急増 | 『信濃毎日新聞』 1954.4.7(4) | 上小地方においてタバコ小売店希望者が競合した場合、未亡人を優先 |
| “血を売る人” 増える南佐 過半数占める女性 | 『信濃毎日新聞』 1955.8.7(4) | 南佐久地方、県厚生連佐久総合病院血液部の登録者は 1948 年時（7 年前）と比べて 3 倍増 未亡人会員 35 名が「血を売る未亡人に」 |

【出典】 信濃毎日新聞社（1945-1955）『信濃毎日新聞』（1945 年 1 月～1955 年 6 月）を基に、筆者作成。

【注】 網掛け部分は血を売る未亡人の問題を取り上げた記事である。血を売る主婦や労働者の問題は、『知性』1(5),1954 年、『週刊 社会保障』8(12),1954 年、『週刊新潮』1(23),1956 年などでも取り上げられ、社会問題の一つとなっていた。

Ⅶ. まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿では、1950（昭和 25）年 3 月～7 月を中心に、花里吉正の闘病生活と苦悩を見てきた。これまで、上田市社会福祉協議会初代事務局長としてホームヘルプ事業化の舵取りを担ってきた花里が注目されることはあったが¹¹⁾、終戦直後の彼の壮年期に焦点を当てた研究はほとんどなかった。時代背景や地域的事情の影響のなかで、自らの進路を模索したり、身を転じようとした行動の裏側にあった彼の実体験や思索とはどのようなものであったのか。そこには、「親のない人だから」などという心ない言葉も見られたが（日誌：1950 年 3 月 5 日）、長兄の吉見を筆頭とし、表象的ないい人ではなく、本質的かつ内面的にいい人となるべく、「神と共にある気持」の重視が見られた（同）。また、制約が多い闘病生活のなかで、衛生管理者資格の取得や『信濃毎日新聞』への投句など、自らのエネルギーを存分に発揮するチャンスを窺っていたことが示唆された。自己と真正面から向き合い、孤独と芸術との関係を考察したり、自殺や人生という深い

命題を熟思したことも、彼の思想形成上、少なからぬ影響を及ぼすことになった。

一方、カナダメソジストの婦人宣教師ミス・ベーツに癒されながらも、献身的な K 看護婦への恋心から、胸を痛め、苦悩し続けた花里からは、多感な 20 歳代後半の一人男性という等身大の姿を看取することができた。恋愛問題については、彼にとっては独力では如何ともし難いほど重大な問題ではあったが、彼の場合、一連の苦しみから、「幸福とは何か」を考究するに至っており、それは現実的かつ本質的なものであり、決して他者に対して追い求めるものではなく、自己の内面に見出すものであるという気づきを得ていたことが明確になった。この内なる幸福感という考え方が、のちの社会福祉分野やホームヘルプ事業化の推進という彼の躍進の背後にある思想基盤の一端となるのだが、この詳細な経緯については時期区分をしながら、当該時期の史資料をていねいに紐解くなかで見出されるものであろう。今後、より精緻かつ慎重な検討が求められる。

今回の論考を通じ、「進駐軍・占領軍と地域社会」や「未亡人・要保護世帯と自立」などの重要なテーマを見出し得たが、これらについては論点の違いから十分に掘り下げられなかった。よって、今後は、これらを探究する一方、花里（のちの竹内）に関しては、とくに先行研究がカバーし切れていない 1980～1990 年代にも着目し、障害者福祉や福祉教育・社会教育の分野でも活躍した彼の実践や思想を詳らかにすることを課題としたい。

注

- ¹⁾ 本稿の主要な分析対象である『和峯記 25.3.1～』（1950年3月～7月）の名前の由来について、花里は明記していないが、花里家の家訓である「以和為貴」の“和”や8人兄妹の“和”を重視し、皆が助け合い協力し合うことこそが尊いとする彼の思想が根底にあったと推察される。

- 2) 横内浄音については、青柳編 (1939:201-202)、上田明照會編 (1940:2018)、恒川 (1975:116-125)、中瀧 (2014a:74-82) などに詳しい。なお、横内と花里との関係性の解明は重要課題の一つだが、本稿とは論点が異なるため、別稿で論ずる。
- 3) 花里が敬慕した実兄、吉見の思想については、宮坂編 (1993:6-29) にその一端を垣間見れる。
- 4) 孤児救済研究については、近年では、山口 (1979:55-88) や庄司 (2000:83-108) などがあるが、親亡き後の多数の子どもたちの生活苦から、個々人がいかに成長し飛躍していったのかの過程に注目した研究は案外少ない。
- 5) なお、花里とキリスト教とのそもそもの接点は、妹かほるが入会していたメソジスト上田教会 (現、日本基督教団上田新参町教会) に上田地区駐在宣教師として赴任した E・L・Bates (ミス・ベーツ) が闘病中の彼のもとを訪れたことが始まりであった。
- 6) 「信毎連載の小説『古き泉のほitori』は大いに感銘深く、その主人たる夫婦の態度に大いに幸福感を知る。而して主人の正しく見る社会又最善を傾注する力に例へ失業しても空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず。然るに天の父はこれを養ひ給ふ。野の百合のいかにして育つかを思へ。勞せず紡がざるなり。今日あって明日は炉に投げ入れらるる。野の草にも神はかく装ひ給へばましてや汝らをや。」から (日誌：1950年3月21日)、新聞記事からも花里は感銘を受けているのが分かる。
- 7) 近年では、中庸から脱却するべきという考え方も見られるが (財形福祉協会 2004:9-11)、花里自身は、人間の心のもちようとして中庸の保持を重視しようとする。
- 8) 婦人宣教師ミス・ベーツに関しては、塩入 (1992)、上田新参町教会 (1992)、中瀧 (2020:39-51) などに詳しい。なお、彼女が上田地区駐在宣教師として活躍したのは、1947 (昭和 22) 年～1948 (昭和 23) 年及び 1950 (昭和 25) 年～1952 (昭和 27) 年の計約 5 年間であった (上田新参町教会 1992:295)。
- 9) その他、「夕食時、鷹見氏室にてうどんを会食す。後、K 嬢レコードコンサートとして軽患者集り、之を聴取す。大いにたのし。しかし K 嬢何となく重苦しい

想ひに耽ってはたたずむ。我も亦胸いたき思ひなり。」や(日誌：1950年7月2日、伏字筆者)、「元気に何もなかった事として清く正しく進むべきである。神に祈り又神もそう導いて居られる如く励まされる。彼女に対し一旦意志表示した後、の事とて何となく心残りあるものの又迫りくる苦しさもあり。一種一様の感に耽りつつ日を過す。」などにも(同：3日)、彼の心情の一端を解説できる。

- ¹⁰⁾ 花里の幸福論は、ヒルティ、ショーペンハウエル、アラン、ラッセルのなかでは、心のあり方を重視したショーペンハウエルに近いと推察され(Arthur Schopenhauer:1906)、日本人のなかでは、法哲学とキリスト教の両側面から捉えようとした三谷(1992)に比較的近似していると考えられる。
- ¹¹⁾ 主なものとしては、竹内(1974:51-69;1991:14-29)をはじめ、長野県ホームヘルパー協会(1991)、須加(1996:87-122)、上村(1997:247-257)、山田(2005:178-198)、荻原(2008:1-11)、中寫(2010:71-83;2012:75-85;2013;2014a～c;2019:1-13)などがあり、これらは概ね、彼をホームヘルプ事業推進の立役者として肯定的に捉えるものが多い。反面、その背後にあった熟考や苦闘などを把握し切れていないところに研究の余地があった。

付記 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金：基盤研究(C)19K02172、研究代表者 中寫 洋)の研究成果の一部である。

史料

花里吉正(1950)『和峯記 25.3.1～』(1950年3月～1950年7月、本稿では日誌)。

宮坂亮一編(1993)『以和為貴——花里家の記録』花里吉見。

上田市社会福祉協議会(1956)「家庭養護婦派遣事業実施要綱」(上田市社会福祉協議会蔵)。

文 献

- 青柳 勇編 (1939)『方面委員令施行記念方面事業大鑑』方面事業調査会.
- Arthur Shopenhauer(1906)The world as will and idea,Vol.2.Library of Alexandria.
- 荏原順子 (2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6), 1-11.
- 上村富江 (1997)「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房, 247-57.
- 厚生省大臣官房企画室 (1958)『厚生白書 昭和 32 年版』大蔵省印刷局.
- 厚生省・全国社会福祉協議会連合会 (1952)【社会福祉行政資料】.
- 三谷隆正 (1992)『幸福論』岩波書店.
- 長野県ホームヘルパー協会 (1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』.
- 長野県社会福祉協議会 50 年のあゆみ編纂委員会編 (2003)『長野県社会福祉協議会 50 年のあゆみ』ほおずき書籍.
- 長野赤十字病院 (1984)『長野赤十字病院八十年の歩み』長野赤十字病院.
- 中寫 洋 (2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』(24), 71-83.
- 中寫 洋 (2012)「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地域福祉』(25),75-85.
- 中寫 洋 (2013)『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.
- 中寫 洋 (2014a)『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.
- 中寫 洋監修 (2014b)『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会.
- 中寫 洋 (2014c)「草創期における家庭養護婦派遣事業と家庭養護婦」『社会事業史研究』(45),31-45.
- 中寫 洋 (2019)「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60(3),1-13.
- 中寫 洋 (2020)「ホームヘルプ事業の推進者が受けた宗教的影響と社会復帰過程——1950 年代前半における花里吉正と婦人宣教師 E・L・Bates との関わりを中

- 心に」『社会事業史研究』(57) 39-51.
- 日本看護歴史学会編（2008）『日本の看護 120 年——歴史をつくるあなたへ』日本看護協会出版会.
- 日本キリスト教団上田新参町教会（1992）『上田新参町教会百年史』.
- 日本国際ギアオン協会 NKJ/ 新共同訳（2007）『NEW TESTAMENT 新約聖書』日本聖書協会.
- 更級埴科地方誌刊行会編（1967）『更級埴科地方誌 第四卷』更級埴科地方誌刊行会.
- 塩入 隆（1992）『長野県町教会百年史』日本基督教団長野県町教会.
- 庄司拓也（2000）「天保の飢饉下の秋田感恩講による孤児救済——近世の災害と民間救済活動」『専修史学』(31),93-108.
- 須加美明（1996）「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2(1),87-122.
- 竹内吉正（1974）「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- 竹内吉正（1991）「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会 20 年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- 恒川武敏（1975）「浄土宗『上田明照会』の社会福祉事業」『仏教と社会福祉』116-125.
- 寺脇隆夫編（2016）『母子・児童・老人福祉基本資料第 1 巻』柏書房.
- 上田明照會編（1940）『上田明照會事業概要』.
- 上田明照会編（2018）『社会福祉法人 上田明照会創立百年史』社会福祉法人 上田明照会.
- 上田市誌編さん委員会編（2002）『上田市誌 近現代編（一）——新しい社会を求めて』上田市・上田市誌刊行会.
- 上田市社会福祉協議会 50 年の歩み編集委員会編（2006）『住民と共に歩んだ 50 年』上田市社会福祉協議会.
- 上田新参町教会（1992）『上田新参町教会百年史』日本キリスト教団上田新参町教会.
- 上田市総務部庶務課統計係（1964）『市勢要覧 昭和 38 年度』上田市役所.

山田知子 (2005) 「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』(90), 178-98.

山口憲志 (1979) 「日清戦後の孤児救済からの出発——阿波国慈恵院の八十有余年の歩み」『月刊福祉』62(10),85-88.

山本茂實 (1979) 『生き抜く悩み——哲学青年の手記』角川書店.

財形福祉協会 (2004) 「中庸からの脱却を目指す——岐阜労働局」『財形福祉』30(5),9-11.